

世界の仲間と競い、親睦を深めた、オリンピックの軌跡。

国際生物学オリンピックは、生物学の才能に恵まれた生徒を見だし、国際交流を深めることを目的に毎年行われています。進化論を提唱したチャールズ・ダーウィンの生誕200年となる記念すべき年に、初めて日本で開催され、過去最多となる56の国と地域から221名の生徒が参加。世界中の仲間と知力を競い合い、友情をはぐくみ、生徒たちにとって一生の思い出となる貴重な体験となりました。

実験試験・理論試験



今年の生物学オリンピックの試験は、6時間の実験試験と4時間半の理論試験で行われ、高校教育の標準を超えるハイレベルな問題が出題されました。



実験試験は、ショウジョウバエの遺伝メカニズムを計算する問題や、りんごを使った植物の発生過程の推測など合計4題あり、観察・計測・レポートなどの一連の実験スキルが試されました。



筆記試験は、生物学の体系的な理解力を問うものから豊かな発想力を必要とするものまでさまざまな問題が出題され、生徒たちからは「難しいけど楽しかった」という声も聞かれました。

交流イベント「つくばナイト」



すべての試験が終了したその夜、日本の夏祭りをイメージした交流イベント「つくばナイト」が開催されました。筑波大学の学生たちによる「和太鼓演奏」や、威勢のいい掛け声を上げて躍動的に踊る「よさこいソーラン」など、生徒も先生方もいっしょになって試験の疲れを吹き飛ばすように盛り上がりました。日本代表の生徒たちは、夏祭りにふさわしい鮮やかな浴衣や、ハッピーにねじりハチマキ姿で登場し、外国の生徒たちから記念撮影を求められていました。



表彰式

大会のフィナーレを飾る、表彰式。生徒たちは伝統的な民族衣装を身にまったり、国旗のフェイスペインティングを施したりと思い思いの姿で参列し、会場は華やかな雰囲気包まれていました。



今大会の軌跡をふりかえるVTRや、国際生物学オリンピックのプーンビポップ・カセムサップ会長のユーモア溢れるスピーチの後、いよいよメダル受賞者の発表です。メダルは成績の上位10%に金メダル、次の20%に銀メダル、次の30%に銅メダルが授与されます。名前を呼び上げられた生徒たちは本当にうれしそうな表情を浮かべ、自国の先生や生徒だけでなく、親睦を深めた他国の生徒たちからも祝福を受けていました。

日本チームは全員がメダルを獲得し、金メダル1個・銀メダル3個という過去最高の結果を残しました。なかでも金メダリストの大月亮さんは全体で6位という好成績を挙げました。国・地域別の



成績を見ると、シンガポール、アメリカ、オーストラリア、中国、台湾などが上位に連なり、金メダルも複数個獲得しています。

最後に、IBOトロフィーが日本の井村裕夫委員長から来年の開催国である韓国のリー・キング・チュー委員長に手渡され、第20回国際生物学オリンピックは、たくさんの思い出を残して閉幕しました。

生徒たちを支えた 教師の物語

生徒を導くには、本人のやる気と同様に、 教師の強い意志が大切です。

石井規雄先生（千葉県立船橋高等学校）

国際生物学オリンピックで日本人初の金メダルを獲得した大月亮太さん。彼を2年間にわたって指導してきた石井規雄先生に、独自の指導方法や、ともに挑戦する教師にとって何が大切かをお話していただきました。



私が指導を始めたころの大月くんはバスケットボール部に所属していたこともあり、生物学オリンピックへの出場を本気で考えてはいませんでした。ところが国内予選の『生物チャレンジ』で高い評価を得て、頑張れば自分も日本代表になれるかもしれないという思いが、彼の背中を押したのです。

われわれ教師は「全国レベルで自分の力を試せる機会」として生徒の参加を促すと良いと思います。じつは多くの参加国では代表選手の成績によって特典があるのですが、日本にはそうした制度はなく、生徒自身が挑戦する意義を見つけることがとても重要となるからです。

ただ、教師にとって指導の時間を作るのは大変ですし、

時間を上手に使う必要があると思います。私の場合、学期中は週2〜3回の特別授業を組み、夏休みには教室を開放し生徒をサポートするような指導をしています。生徒の挑戦を支えたいと思ったら、教師はまず、生徒に何を伝えたいのか自問自答すると良いでしょう。私はやはり教えることが好きで、生物の本質的な面白さを伝えたいという思いがあります。自然への理解を深め、自然全体のつながりを発見し、物事の見方が変化していくとき、生徒たちの目は輝いています。

生物学オリンピックに挑戦するには生徒自身の努力は重要ですが、教師として何をしたいのか強い意志を持ち、それを実践することも同じように大切だと思います。

さまざまな経験や仲間との交流を通じて、 人として成長できるすばらしい機会です。

奥田宏志先生（日本代表チームリーダー 芝浦工業大学柏中学高等学校）

代表選手の選考や強化トレーニングなど、準備段階から長期にわたって日本チームを支えてきた奥田宏志先生に、生徒たちが国際生物学オリンピックに挑戦する意義について語っていただきました。



生物学オリンピックに出場するまでの間に、生徒たちはいろいろな先生方のお世話になり、普段の高校生活では学べないことを吸収し、人として大きく成長していきます。いざ国際大会の舞台に立つときには、日本の代表として恥ずかしくないようにという強い気持ちがみなぎっていて、スタッフとして胸を張って送り出してきました。彼ら、彼女らの成長の過程に関われることは、とても大きな喜びです。

また大会を通じて、かけがえのない友人たちと出会うこともできます。生物が好きな生徒は学校では何百人の

うち数人かもしれませんが、世界中からここに集結する生徒たちはみんな生物が大好きです。しかも今年は過去の国際大会に出場した日本代表の先輩たちが応援に駆けつけ、世代を超えた仲間同士の絆も生まれました。

生物学オリンピックには生物学の知識や思考力を競う試験があるので、学力偏重のイメージを持たれがちです。しかし実際には、生徒の人間的な成長やいろいろな人との交流こそが大きな財産になると思います。10年後には、今の代表の生徒たちが大会の運営や引率をしているかもしれません。今後のさらなる成長が楽しみです。

一生の宝物になる、思い出を胸に。～日本代表の4人の感想～



指導してくださった先生方への感謝の気持ちでいっぱいです。

千葉県立船橋高等学校3年 大月亮太さん

金メダルを取ることができ、びっくりしたのと同時にすごくうれしいです。これまで指導してくださった先生方のおかげだと思いますし、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

僕は英語があまり得意ではないのですが、外国の高校生たちと身振り手振りを交えて一生懸命意思を伝え合ううちに、友達になることができ、とてもいい経験ができました。

試験ですばらしい成績を残せたことや世界中の生物好きの仲間との交流を通じて、生物って本当に楽しいなと再確認できました。僕は子どものころから生物の学者になりたいと思っていたのですが、やっぱりこの道を進んでいきたいと確信しました。



あきらめずにチャレンジすれば、道は必ず開けます。

桜蔭高等学校（東京都）3年 山川真以さん

銀メダルとりました！感無量です。生物学オリンピックは2回目の挑戦で、前回は国内の最終予選で落ちてしまい日本代表になれなかったこともあって、本当にうれしいです。

この2年間でふりかえると、まるで息をするように、ごく自然に生物の勉強をしてきました。それに貴重な体験もさせていただき、自分の知識や考え方を成長させることができたと思っています。お世話になった先生方には心からお礼を言いたいです。

生物学オリンピックは普通の高校生にはできない特別な経験ができる機会だと感じました。生物が好きなのにはぜひチャレンジしてもらいたいです。あきらめずにやれば、道は必ず開けますから。



問題は難しいですが、それを解くことはとてもおもしろいです。

灘高等学校（兵庫県）2年 中山敦仁さん

生物学オリンピックに出題された問題は、実験試験も理論試験もとても難しいのですが、その内容は興味深く、解くことがおもしろいと感じられるものばかりでした。

大会期間中はイギリスの生徒と相部屋だったこともあり、海外の方と交流する機会がたくさんありました。試験の合間には日本のアニメの話題で意気投合したり、「つくばナイト」では日本の祭りや踊りをいっしょに楽しんだりもしました。

驚くほど生物の知識がある人とも知り合え、彼らが将来どんな研究をしていくのが楽しみです、自分も生物の研究者をめざしてがんばっていきたいと思っています。



生物学は、一生をかけるに足る学問です。

桜蔭高等学校（東京都）2年 谷中綾子さん

メダル受賞者発表のとき、じつはメダルがとれるか不安でドキドキしていました。いざ銀メダリストに自分の名前が呼ばれたときはとてもうれしかったのですが、それだけでなく金メダルを逃した「あ〜」という悔しさもこみ上げてきました。

この結果は私にとって大きな自信になりました。また、世界中の生物好きな仲間と将来のことを話し合ううちに、生物学とは一生をかけるに足る学問だと感じました。

将来は、環境変化の影響で白化現象が起きている、サンゴ礁の研究をしたいと思っています。その前に、来年の生物学オリンピックにもぜひ挑戦したいです。今度は、金メダルをめざして。